



退官教官からのメッセージ 「私の読書遍歴」

電気工学科 渡部 磯雄

十二支で今年は申年です。なぜ、「猿」と言う文字を使わないで、「申」という字を使うのか分かりませんが、何しろ2000年も前に中国で使われ始めたことなので、よく分からないらしい。猿は、類人猿と言われるように我々人類に近く、知能が極めて高い。アメリカにボノボのカンジと言いう天才類人猿がいます。カンジとは実にいい名前をつけたもので、1,000語位の言葉を使い分け、文章も作るらしい。「私はお腹がすいた」などは勿論のこと、「今日は気分がいい」など、抽象的なことも表現できるようです。カンジ君はだいたい人間の4歳くらいの知能があるそうですが、類人猿のDNAは人と97%位同じですから当然といえば当然です。しかし、人間の読書については、4歳以後からが違ってきます。文字を読みこなせる4歳くらいから、以後、読書量が幾何級数的に増えて知識を吸収し、感動を覚え、人の生き方を学んでいくようになります。そこで、ごく平凡と思っている私自身の読書歴について書いてみます。

読書についての考え方は、年齢によって発達段階があり、その影響も違います。私の記憶では読書に興味を持ったのは小学校2年のとき、教室が図書室の隣にあったため、手当たり次第に本を読みだしたことが、最初だったように思います。特に、講談社の少年文学全集については時間を忘れ、授業の始まりも忘れて読み耽ったことを覚えています。「ロビンソンクルーソー」などを読んで、自分も経験したいと憧れたりもしました。中でも「岩窟王」を読み始めたときは、図書室に誰もいないことをいいことに、夕暮れ時まで読み続け、校舎が暗いシルエットにつつまれる雰囲気満点の中でワクワクしながら読み続けたことを鮮明に憶えています。なにしろこの時分は本に対して先入観も目的も無く、手じかに有った本や、親が買ってくれたものを、ただただ面

白くて読んでいたように思います。

読書歴の2ページ目になると、今まで受動的に与えられた本を読んでいた状態から、自ら読みたい本を選択的に選ぶようになりました。

昨年、NHKの大河ドラマで吉川英治原作「宮本武蔵」が放映されました。この吉川英治作の「宮本武蔵」には、格別の思い出があります。小学校3年の時でしたが、今までなんとなく近寄り難かった父親の本箱の中にこの本を見つけました。大体5冊くらいで構成され、1冊も分厚く、所々に入っている挿絵の魅力に惹かれて読み始めました。元々この小説は新聞に連載されたものですから、毎日載っていた挿絵は今でも見たいと思っている程です。そのような感慨を持ってテレビを観ると当然のことながら全く似て非なる話でした。例えば、関が原の合戦直後から物語は始まりますが、小説の描写では合戦の空しさや哀しさが、そくそくと伝わってきます。一方、テレビでのやたら威勢のいいシーンを観ていると、大げさかもしれませんが、読書から得る感慨の大きさは比較になりません。作者は友人から、武蔵は単に剣術の強い二流の人物だ、と言われたことから執筆し始め、武蔵に対しての精神性の深みを書きたかった筈です。私は、この「宮本武蔵」を読んだ後、三大大衆小説と言われる白井喬二「富士に立つ影」、中里介山「大菩薩峠」などの長編小説を初め、世評に高い小説や文学書を読み始めました。これらのことから、読書は自分の人生観の礎を作ったと思います。

読書歴の3ページ目は人生を方向づける本との出会いや専門書について書き進みたいのですが、許された紙面が尽きてしまいました。竜頭蛇尾、羊頭狗肉になってしまったことを謝し、いずれかの折、この続きを書いてみたいと思います。